

## 事例4 糖尿病専門病院として生き抜く

医療法人 萬田記念病院

### 【要約】

医療法人萬田記念病院は全国有数の糖尿病専門病院である。昭和57年に理事長が就任して以来、糖尿病診療に特化してきたが、現在では糖尿病センターはもちろん、血液透析センターや眼科まで併設した糖尿病フォーカストファクトリーとなっている。毎日3回、カリキュラムを組んだ糖尿病教室を開くなど、患者教育を徹底し、院内の職員にも糖尿病療養指導士（CDE）の取得を奨励するなど、教育に力を入れている。

目標は世界に通用する専門病院として情報発信をしていくこと。夢と抱負を抱く病院である。

Keyword：糖尿病センター、患者教育、職員教育、CDE、アンケート委員会  
（詳細は「医療施設経営ハンドブック」に記載）

## プロフィール

所在地 北海道札幌市



開設日 昭和31年7月10日

病床数 89床

診療科 内科、消化器科、眼科、皮膚科、血液透析

職員数 医師6名（非常勤16名）、看護師56名、准看護師11名、薬剤師3名、診療放射線技師2名、看護補助者6名、臨床検査技師2名、管理栄養士3名、臨床工学技士6名、治験コーディネーター2名、事務職12名、その他5名

## 沿革

昭和 31 年 7 月	萬田内科医院開設
昭和 40 年 8 月	萬田内科病院（名称変更）（許可病床 89 床）
昭和 50 年 11 月	第 1 期病院改築工事完成
平成 4 年 8 月	第 2 期病院管理棟工事完了
平成 5 年 2 月	基準看護特 1 類の認可
平成 5 年 7 月	糖尿病センター設立
平成 6 年 7 月	眼科開設
平成 6 年 12 月	院外処方の実施
平成 7 年 6 月	第 3 期病院新築・改築工事完了
平成 10 年 9 月	医療法人 萬田記念病院へ名称変更
平成 12 年 12 月	フィルムレスレントゲン導入

## 1. 拡大と専門特化

### (1) 糖尿病センター設立

院長が大学病院に勤務している頃の糖尿病外来は、患者にとって 1 日かかり、また糖尿病患者の眼科受診も 1 日を費やしていた。「何とか時間のかからない診療ができないものか」と、大学病院で診療しながら考えていた院長は、自院に戻った後、複数の糖尿病専門医や透析医、糖尿病眼科専門が常勤する糖尿病センターを設立することを決意した。

それが実ったのは平成 5 年。北海道大学第 2 内科からセンター長を迎えた。平成 7 年には血液透析センターを開設。その間、平成 6 年に眼科を開設し、当初は非常勤医で運営していたが、平成 10 年に眼科部長が就任して常勤体制を実現した。

### (2) 16 年間に 4 回の増改築

院長が就任してから平成 10 年までの 16 年間に、病院は診療を続けながら増築と改築を繰り返した。昭和 58 年 12 月から老朽化した病院の第 1 期改築工事にとりかかった。平成 4 年 8 月には、個人病院から医療法人病院に生まれ変わったのを機に、第 2 期改築工事を完了させた。その後、常勤医の増加に伴って患者が増えてきたために、平成 7 年、第 3 期工事を完成させた。

糖尿病患者はその後も増え続け、入院患者のアメニティを向上させる必要も出てきたことから、平成 10 年 8 月には第 4 期増改築工事と建物の耐震改修工事も完成させた。

### (3)新しい機能の追加と体質改善

これまで4回の増改築に際しては、単に建物を拡張、一新するだけでなく、その度に新しい機能を付加したり、経営体質の改善も行った。平成10年8月には、医療機能評価機構の認定を受けるとともに、2人のコーディネーターを常勤とする治験コーディネーター室を設けた。同年10月には、病院名を医療法人萬田記念病院に改めた。

糖尿病に専門特化していく中で、病院内の業務が、従来どおりの診療の仕方や書類の書き方、仕事の進め方といったように、しばしば因習的な業務のあり方にとらわれてしまいがちであるという問題点があった。こうした問題点を解決するために、病院機能評価の認定を受けたわけである。認定を受けることについて、当初は職員にも抵抗があったが、認定を受けるために必要とされた書類の整備や業務の考え方が職員に伝わる中で、診療での標準的なあり方を理解できた点や書類の整備の仕方等多くの参考となる考え方が認識され、職員の理解を向上させることができた。こうした意味での認定の価値は大きいといえる。

前述のとおり、萬田記念病院は糖尿病新薬の治験（フェーズⅠ、フェーズⅡのみ）に協力している。新しいGCP（グッド・クリニカル・プラクティス）が1997年4月に法制化されてから、厚生省（現厚生労働省）は治験に対して非常に厳しく、かつ治験の方法も煩雑になっている。同院は、いち早くその対応を整えていたため、新GCP以降、治験数は大幅に伸び、平成12年には約100例の治験を行っている。これは全国でもトップクラスの数である。「専門病院として大事な使命」と考え、その後も治療に力を注いでいる。

## 2. 患者指導とスタッフ教育

### (1)患者指導ができるスタッフ教育

糖尿病治療に関する専門性を高めていくために、院内では勉強会を積極的に開催している。また、院内の職員「看護師、薬剤師、栄養士」には、平成13年から始まった全国共通のCDE（Certified Diabetes Educator：糖尿病療養指導士）の資格取得を奨めている。

教育活動は、院内にかぎられたことではないことは言うまでもない。各スタッフは糖尿病学会や関係学会の会員になり、学会発表を行っている。コ・メディカルスタッフは16年前から毎年、全国各地の専門施設に見学・研修に出向き、意見交換を行って

る。4年前には、メルボルン、コペンハーゲン、ボストンなどにある世界的に有名な糖尿病センターとの交流も始めた。医師ばかりでなく、他のスタッフも研修に出かけ、レベルアップに努めている。

## (2) 毎日実施する糖尿病教育

糖尿病教育には集団指導と個別指導がある。集団指導とは、糖尿病教室を月曜日から金曜日まで1日3回、1回30分の講義を、10日間を1クールに約40人のスタッフで行っている。

個人指導としては、病棟や外来で、個々の患者及び家族に生活指導や栄養指導、インスリン注射や血糖自己測定指導などを行っている。

同院はまた、3年前から糖尿病教育ビデオを毎年1本、自前で制作し、自院の患者はもちろん、道内の全医療機関3500か所と、全国の糖尿病専門施設など約2000か所に配布している。教育目的に加えて、病診連携や紹介率の向上を目指してのことである。

## 3. 病院の経営

### (1) 紹介患者は60%

糖尿病専門病院としての同病院には数多くの患者が紹介されてくる。紹介患者の比率は既に60%を超えている。紹介患者の実数は月間60人程度で、その内訳は、約半数が教育入院、4分の1は血糖コントロールができなくなった患者、残り4分の1は血糖値が高いために手術ができず、緊急に血圧を下げることを依頼された患者で占めている。「紹介率を高めるためには、患者離れを良くすること」を心がけている。

### (2) 安定した経営状態

平成4年に医療法人を設立してからは、経営状態は比較的安定しているといえる。糖尿病に特化する場合、患者に必要な薬剤は比較的量が多いと考えられ、また当初は薬価差益が大きかった。しかしながら、同院では薬価差益に依存した経営体質を問題視し、院外処方に切り替えた。当初は薬価差益がなくなることによって一時的に経営は厳しい状況が発生したが、在庫を抱えずに本業の質を高め、平均在院日数を短縮する等の努力を通じて経営状態は安定して維持することができるようになった。

### (3) 現在の取り組みと今後

萬田記念病院は、3年前から院内のIT化に取り組んでいる。初めに約40台のパソコンを各部署に配置し、院内LANを敷設した。また、院外ともインターネットで情報の交換を行っていて、ホームページも作成して週1回更新し、院内外に発信している。

平成12年12月からは、レントゲンフィルムをフィルムレス化し、高機能液晶ディスプレイによるフィルム読影を行っている。今後数年以内に将来受付業務、外来予約機、自動会計計算機、患者バーコード化、ペーパーレス、オーダリングシステム、電子カルテなどを手がけている計画を立てている。